

# 海外河川研修会『アメリカのウォーターフロントとカトリーナのツメ跡』に参加して



研究第一部 主任研究員 山木 健一

## 1. はじめに

今回の研修は、学術団体「日本河川開発調査会」が主催し行われたもので、米国のウォーターフロント開発の現状と、ハリケーンカトリーナの被災実態について、その実情把握を目的に、米国各都市を調査したものである。

## 2. ニューヨーク (Robert F Wagner Jr. Park)

マンハッタン南端、Battery Park Cityは、70年代、世界貿易センター群建設残土で造成された。散歩道や公園など川沿いを中心にゆったりと配されている。品川の天王洲アイルなど、Battery Park Cityを手本とした日本のウォーターフロントも多い。

NY市長の名を因んだ公園がRobert F Wagner Jr. Parkである。早朝からランナーやウォーカーが行き交い、日中は観光客も多く、自由の女神像をカメラにおさめる人の姿が見られる。

美しく管理された芝生エリアは、No Dog・No Activeと明示された子どもたちが元気よく過ごせる空間として整備され水辺の開放感と、利用制限により確保された安全性により、子どもの笑顔と歓声が絶えない安心空間を作り出している。



## 3. サンアントニオ (River Walk)

1921年のサンアントニオ川の大規模な洪水を契機に、本川をショートカットし、旧川と市街地を生かしたりパーウォーク構想が打ち立てられた。川の遊歩道構想に

より、レストラン、劇場、ショッピングモールなどが相次いで建てられていき、文化の拠点として



も発展した。

旧川を活用した水辺空間整備は、単なるプロムナード整備や植樹整備という点にとどまらず、周辺の建物構造や景観的調和を企図している点が秀逸である。まさしく河川を活かしたまちづくりの最高峰といえると感じる。

## 4. ニューオーリンズ (Hurricane Katrina)

ハリケーンカトリーナは、2005年8月末にアメリカ南東部を襲った大型のハリケーンで、海に面するニューオーリンズで特に被害が著しかった。浸水の直接の原因は、ポントチャートレイン湖とミシシッピー川を結ぶいくつかの運河・水路が破堤したことによる。

被災後、市の公共サービスは完全に麻痺し、支援物資の不足により、高齢者などの衰弱死が相次いだ。

市内の各地では廃墟のような街並みが広がり、遺体が水面を流れているという絶望的な光景が広がった。



黒人居住区のInner Harbor

Navigation Canalのコンクリート・パラペット護岸が破堤した箇所は、その凄惨な現場であったとされる。

被災した地域の住民の多くはアフリカン・アメリカンであり、人種差別や貧困といった問題が被害を大きくした要因でもある。今なお、低所得者層は市内への戻ることができず、市の人口は1/3程度まで減少しているといわれている。

## 5. おわりに

今回の調査で、都市の水辺空間利用の様々な知見を得ることができた。米国では、河川とまちとの一体的な整備・利用のために、河川をまちの構成要素のひとつとして活用していると感じた。

また、ニューオーリンズでは、被災の恐怖を肌身で感じ取ることができた。想像し得ない大規模災害がありうることを肝に銘じて、技術者としてあらためて緊張感と責任感を再確認できた。

この貴重な機会を与えてくださった皆様にこの場を借りて御礼を申し上げます。